

べるのですが、ここではそれ以外に精製を何度か繰り返し無色透明になったものも製造しています。そこまで精製されたものは食品添加物として認められており、血糖値を下げる作用があるそうです。オロナミンC位の大きさに1本3,000円。口コミで販売されているそうです。

実はここが炭アクセサリーの生まれた場所です。「フラスコに木酢液を入れると中が茶色になって、洗えないのでそれまで使い捨てだったんですね。それが炭を入れて振るときれいになるんですよ。で、洗ったあとに使った炭に触ると硬くて、手が黒くならないのを私が発見して“これは使える！”と思ったんです」と桐山さん。

桐山さんに「どうやってムラに入っていったんですか」と尋ねると「それが悩みなんですよ」と言います。しかし桐山さんとお話ししている間に、同じ群馬県内から訪れてきた女性、農園レストランを経営する人や村の中学校で英語を教えているアメリカ人の先生、また大家さんが野菜を持っ

てきてくれたりと、さまざまな人たちが立ち寄ってきます。また、有機野菜、炭アクセサリー販売、イベントで知り合った都会の人たちともつながりを作っています。コギャル時代の仲間とは今でも親しく、片品村まで遊びに来てくれるそうです。

いま、全国の農村で高齢化、後継者不足が生じています。桐山さんは農村と都会のいわば“接着剤”になっているように思えました。桐山さんのような存在が農村に若い人を呼び込み、活性化していくのではないかと。確かに、一人の力では村全体を活性化するのは無理でしょう。しかし、そのような人が増えていけばやがては大きな力になるのではないかと。

桐山さんの「今、村でお年寄りがどんどん亡くなっているんですよ。ムラの生活技術だけでなく、自分を受け入れてくれたばあちゃんの人柄も受け継がなきゃいけないと思っているんです」という言葉が印象的でした。



労協連だより

古村 伸宏

福田首相の突然の辞任から自民党総裁選騒ぎ、そして麻生内閣の誕生と政局の秋の気配。選挙を間近に幹事ながら、法制化運動もヒートアップしてきた。この間取り組んできた地方議会での意見書採択は、200議会(10/4現在)にまで広がった。おそらく年内で500議会に近づく勢いである。そんな中開かれた9.13全国市民集会には650名

を超える人々が結集。横浜集会以降、地域で運動が広がり、法制化を求める声と運動の主体が多彩になってきたことが実感できた。特に、過疎や財政難に悩む地方において、協同労働が地域再生に住民が立ち上がる姿をイメージする人が増えているように感じる。

意見書採択の取組みは、労協組合員の行

動をさらに広げ、地域の人々と呼応する流れをつくり出している。この流れは法制化後の青写真を描く作業へと連動し、さらにうねりをつくろうとしている。仕事おこしの本格実践が求められる段階。連合会組織のあり方や、各県ごとに準備を進めているワーカーズコープ連合づくりも、具体化を急がれる。

政局の秋の中、いよいよ議員連盟の動きも、選挙後を睨みながら動き始めた。法案骨子が作成され、法案の内容づくりも本格段階である。まだまだ骨子案は、我々の求める内容との距離はある。しかし、正式に骨子案が衆議院法制局によってまとめられた意義は大きい。法制化の最終局面を実感させる緊張感が高まってきた。全国・全市民的に、法案についての意見交換の機会を設けていくことになる。求める運動から煮詰める運動へと、最後の踏ん張りどころだ。

アメリカ・サブプライム発の「嵐」が本格化してきた。これを契機に、世界経済とその中で日本のさまざまなマネーがどう動いているのかがあぶりだされ始めている。そんな中で、嵐に耐え、嵐を越える地域経済と豊かな公共、そして市民が主体者とし

て育つときが来た。指定管理者制度の第2クールに対しても、公共の仕事が新たな仕事を地域でつくり出していく提案を前面に押し出し、挑戦の幅も広げている。何よりも、法制化運動と公共の担い手としての挑戦が結び、意欲と可能性を高めている。いまこそ協同組合の出番である。11月22～23日に開かれる全国協同集會も、「協同組合の時代」と「協同労働の時代」を示す絶好の機会である。集會の準備過程で、これまでにない「協同組合とは」についての意見交換も、時代の反映である。さまざまな困難の中で、協同組合の最も本質的な価値は、「人の成長・発達」によって図られるべきである。協同組合運動を通じて、組合員は豊かに、賢く、人間性を育てているか。この課題は、公共とは何かに通じ、連帯を生み出す行動に直結する。多面的な「生」の育ちが問われる時代。その中心に「協同」と「労働」を据えることが、嵐を超える市民自治と言えるのではないか。そんなメッセージが人々の心を捉え、行動を生み出すためにも、もう一踏ん張りの努力を惜しまず、仕事おこしの王道へと入っていきたい。

## 研究所だより

榎本 木綿 / 関 智子

厳しかった残暑もいつしか夜長の虫時雨へと変わり、すっかり秋の気配となりました。協同総研でも今夏の新体制スタートからようやく落ち着きを取り戻しつつ、秋のフォーラムや各種集會の準備に目まぐるし

い日々を送っています。

『いま「協同」を拓く2008全国集會in新潟』もいよいよ開催間近に迫ってきました。今回の集會では、協同組合関係者ばかりでなく、数多くの地域NPO関係者や市民、学